

太田アミさん

今日は、日曜日なので書道教室がある。三、四人の友達と遊んだ帰りに、えり子さんが、「今日、いっしょに書道教室に行かない？三時と四時のどっちがいいか、お母さんにきいて電話するよ。待ち合わせはいつもの広場ね。」と、わたしをさそってくれた。

「うん、いいよ。それじゃ、電話を待ってるね。」

家に帰って昼食を食ぐ、その後、一階で本を読んでいた。一時になったので、居間にいた母に声をかけた。

「えり子さんから、電話、かかってきた？」母は、少し首をかしげて答えた。

「ちよっと、おとなりに行っていたから分からないけど、かかってこなかったと思うわ。」

「ふうん。えり子さん、どうしたのかな。」

少し待っていたが、落ち着かないので、こちらから電話をかけてみた。

すると、えり子さんのお母さんが電話に出た。

「えり子は、今ちよっとお使いにに行っています。でも、すぐ帰りますよ。」

と教えてくれた。時計を見ると、一時十分過ぎだった。三十分もすればえり子さんも帰るだろうと思って、伝言をたのんだ。

「それじゃ、一時ころ、いつもの広場で待っていますと伝えてください。お願いします。」

一時五分前、約束の広場に行った。えり子さんのすがたは、見当たらなかった。三十分近くも待ったが、えり子さんは来ない。

「何をしているのだろう。人をさそっておいて電話もせず、来もしない」

もう、一人で書道教室に行こうと決心した。

教室で練習をしていると、三時すれすれころになって、えり子さんがやって来た。

「ごめんね。あの——。」

えり子さんは、おそくなった言いわけを始めだけれど、わたしは知らん顔をしていた。

「なによ。約束を破っておいて、今さら。」と思った。もう、えり子さんとは、付き合いたくなくなった。

